藍を建てる
―きものを化学する、の巻―

藍建（あいだて）・・・水に溶けない藍玉をアルカリ溶液で還元し、可溶性の白藍とすること。　(広辞苑)

夏が近づくと、藍色の清涼感が目に心地良く感じられます。そこで今回は、「正藍染め（しょうあいぞめ）」という技法をご紹介します。その名の通り藍色に染めることですが、これがなかなか奥の深いものなのです。キーワードは上記の「藍建」です。この化学反応を、これから季節を追いながら説明します。どうぞご一緒に、藍色の誕生をたどって下さい。

５月・・藍色の出発点、縮藍（ちぢみあい）の種蒔き。

６月・・藍苗が育つ。

７月・・花がちらほらと咲き始める頃、茎を 15 センチほど残して一番刈りをする。

８月・・刈り残したところから芽が伸びるので、二番刈りをする。

↓　　刈り取った葉を、むしろに広げて太陽で干して、乾燥させる。

その後、俵に詰めて天井裏につるす。

１月・・土間に藁束を並べむしろを敷く。乾燥させておいた藍の葉を洗い、むしろの上に盛り、その上にまた、むしろと藁束をかける。３ヶ月の間に、この山を崩したりまた山にしたりを繰り返す。藍の葉は発酵熱を出ので、温度が 50～60 度になる。この間に微生物の作用によって、藍の葉に含まれるインジカンという配糖体が加水分解されて、白藍という水に可溶性の物質

となる。この物質は空気に触れると酸化されて不溶性の青藍になる。

4月・・こうして**可溶性になった葉を臼で餅のようにつき、10センチほどの玉に丸め、乾燥させる。これが、藍玉**。

5月・・水を張った藍がめに藍玉を崩して入れ、**アルカリ性にするために木灰を加える。この作業を藍建という。藍がめ内では、アルカリ性細菌によって青藍が還元されて、白藍に変化して行く**。5〜6日間放すると、**空気に触れた表面に濃い紫色の泡(通称、藍の花)が立つ。この状態を、藍が建つという**。この中に布を入れ染めた後空中に引き上げると、最初は茶褐色だが、しみ込んだ白藍は、次第に空気酸化によって不溶性の青藍となる。染めと酸化を繰り返す度に、深い藍色になる。

以上が正藍染めの行程であり、藍建の謎解きです。藍は1ヶ月ほどしか建たないそうです。その短い命のために、種を蒔き、乾燥させる作業に約1年を要します。自然が相手ですから、一瞬たりとも気を抜けません。このようにして得られた尊き藍の命を、これより浴衣でご披露します。そろそろ夏祭りや花火大会が待ち遠しい季節になりました。浴衣は、湯帷子(ゆかたびら)の略で、入浴後に湯気を拭い取る時や、夕涼みの時に着るものとして素肌に直接着けたので、長襦袢と呼ばれる下着と共に着る「きもの」とは区別され、外出には向かないものとされてきました。しかし近年、高級浴衣と言って「きもの」のように着られる浴衣が注目されています。今年は是非、正藍染めの浴衣のを着こなして下さい。

参考資料：『きもの紀行』　立松和平　著、　家の光協会　刊
『下着の文化史』　青木英夫　著、　雄山閣出版　刊
その他、藍染めに関するHPいろいろ